

マラキ書3章19—20節

テサロニケの信徒への手紙2章6—13節

ルカによる福音書21章5—19節

来週は、降誕節前主日です。早いもので、教会の暦の上では、来週で一年が終わります。それゆえ、本日の聖書日課に共通しているテーマは、終わりです。

旧約日課は、マラキ書ですが、この文書は、正典の『聖書（聖書）』の最後に位置しています。その成立年代や著者、歴史的背景は不明ですが、内容から推測して、バビロン捕囚以後であると考えられます。

バビロン捕囚までのイスラエルの歴史は、これまでも様々な旧約日課の際に触れていますが、終わりという事柄を用いて説明しますと、何度もいろいろな意味で終わりを経験したにも関わらず、その都度主なる神様に助けを求め、助けられ、そして助けられると、また神様から離れて終わりを迎える、そのようなことの繰り返しであったといえます。それはマラキ書にも反映しています。

マラキ書全体の内容をおおまかに言うと、まず、イスラエルに対する批判が書かれています。主なる神様が、イスラエルを愛しているにも関わらず、イスラエルは、その愛に応えることなく、神殿祭儀と律法をおろそかにし、神様に対して不満を語り、神様に対する熱心さを欠いてしまいます。そのことが批判されているのです（1章、2章）。次に、そのイスラエルに、悔い改めを勧告すると同時に、審判・終わりの時である主の日がおとずれることが書かれています。それは、その審判を通して、彼らが神の民として精錬されるためです（3章）。本日の箇所は、この審判に関する箇所の一部です。

「その日が来る、かまどのように燃える日が。傲慢な者、悪を行う者は、すべてわらになる。到来するその日は彼らを焼き尽くし、根も枝も残さない——万軍の主は言われる」（マラキ3:19）は、恐ろしい光景を描いています。マラキ書が書かれた時代よりも、大量破壊兵器が発達した現代のわたしたちの方が、この光景のイメージを鮮明に想像できるかもしれません。しかし、次の節では、「しかし、わが名を畏れるあなたがたには、義の太陽が昇る。その翼には癒やしがある」（マラキ3:20）と続き、回復の希望が示されます。現在の聖書日課は、19と20節のみですが、前の聖書日課では、マラキ書の最後24節までが範囲でした。そこには「大いなる恐るべき主の日が来る前に、私は預言者エリヤをあなたがたに遣わす。彼は父の心を子らに、子らの心を父に向けさせる。私が来て、この地を打ち滅ぼし尽くすことがないように」（マラキ3:23）とあります。イスラエルの背きの故に、すべての終わりのような滅びの現象が来るのですが、希望は必ずあるのです。また、この箇所に「父の心を子らに、子らの心を父に向けさせる」という表現があるように、ここに描かれている主なる神様とイスラエルの関係は、親子関係に置き換えて考えると、分かりやすくなります。主なる神様は、厳しい親なのですが、子どもであるイスラエルがかわいくて仕方がないのです。しかし、子どもであるイスラエルは、その親の気持ちを、理解しながらも勝手なことばかりして、間違をくりかえします。そしてその都度、主なる神様に助けを求め、イスラエルを大切に思う神様も、厳しく叱るのですが、逃げ道

を与えてしまうのです。

本日の20節も破滅という厳しさと同時に、回復の希望を示していますが、以前の聖書日課にあった3章23節のエリヤに関する記述は、さらに終わりの時に際した希望という観点で、さらに拡大解釈されていきます。自分たちが困難なことに直面した時、預言者エリヤが到来すると考えるようになるのです。そして、その期待は、救い主であるメシアの期待と結び付いて、自分たちが本当に困っているときに、自分たちだけにはメシアを通じて決定的な救いが訪れる、その一つの具体的な前触れとして、エリヤが再来する、そのような信仰へと発展していきます。主なる神様がイスラエルに求めたのは、神殿祭儀をしっかりと行い、日々律法をしっかりと守って、自分の愛に応えてくれることでしたが、イスラエルの人びとは、誰がエリヤで、いつそれがくるのか、エリヤさえ来れば救われる、そのように考えてしまったようです。

そのような信仰や期待は、イエス様の時代にも存在し、福音書の物語には、イエス様がエリヤだと思われた場面もありました。しかし、教会にとって大切なのは、イエス様が決定的な救いをもたらす救い主であると信じると同時に、その救いは地上の集まりに限定される事柄ではなく、世の終わりが到来するとき、その救いがすべての人に対して完成すると信じることです。この世の終わりという事柄に関わる信仰は、本日の使徒書と福音書にも関連していますが、そこにおいては、時代背景による違いがあります。

使徒書は、「**きょうだいたち、私たちの主イエス・キリストの名によって命じます。怠惰な生活をして、私たちから受けた教えに従わないすべてのきょうだいを避けなさい**」(一テサ3:6)から始まります。排他的な印象を与えますが、その理由は、この文言を書いたときのパウロが、救いの完成の時、すなわち終わりの時を非常に近いと感じていたからです。また、「**実際、あなたがたのもとにいたとき、私たちは、「働こうとしない者は、食べてはならない」と命じていました**」(一テサ3:10)は、20世紀になり有名になった言葉の起源ともいわれています。パウロは、救いの時が近いと考えるからこそ、それに与れる人は限られると考えていたようです。それ以後書かれた手紙では、そのような考えは後退します。本日の福音書も小黙示録とも呼ばれる箇所であり、世の終わりについての事柄が記されています。その背景には、おそらくユダヤ戦争によるエルサレムの破壊や、ローマ帝国による教会への迫害があると思います。教会への迫害は、主なる神様への背きによる苦しみではなく、教会が信じたからこそ起きた苦しみです。しかし、福音書のイエス様は、どのようなことがあっても信仰を失うことなく、信仰を守り続けることを求めています。それは、信じる人がいる限り、本当の救いとそれに基づくまことの平和が、この地上にもたらされる希望が、未来に向けてあり続けるからです。

本日はバザーです。今年は、10月末ではなく、11月中旬に、ことにクリスマスを迎える準備につながるようなバザーをという趣旨でもバザーを持ちます。しかし、「**支えあおう、つながろう**」というバザーのテーマにある通り、わたしたちが示すべき事柄は、イエス様を信じる希望に生きる信仰者のまじわりです。イエス様を信じているから、何があっても支えあえるのであり、つながることができるのです。バザーという一瞬の時ではありますが、そのことを示せるバザーを持ちたいと思います。